基盤科学系・吉川研究室（日欧文化交流史）

「ジャポニスム」を丁寧に読み解き、日本文化を国際的な視点で捉え直す

吉川順子 准教授
［基盤科学系］

［経歴］
2014年03月–
信州大学全学教育機構 講師
2015年09月–
京都工芸繊維大学 准教授

［研究分野］
日仏文化交流史，日欧文化交流史，
ジャポニスム，日本の伝統芸能，比較文化

研究室探訪

基盤科学系・吉川研究室
（日欧文化交流史）

［研究概要］
フランスをはじめとする欧米諸国で、
日本文化に影響を受けて展開された
芸術運動「ジャポニスム」。
そうした交流史の中で、
日本の様々な伝統芸能が
どのように知られていったかを、
当時の日本紹介本や新聞、文学作品、
芸術作品を通して調査しています。

ジャパンカルチャーに関するイベントを毎年開くなど、日本との関わりがとても深い国、フランス。かつての日本ブーム「ジャポニスム」もここから広がりました。吉川研究室では、フランスの人々が日本文化をどのように見て、どのように解釈してきたかを探究しています。

欧米諸国を席巻したジャポニスムとは

日本の古典や歴史書、芸能史、そしてフランスの美術書―時代を越え、国境を越えた書籍が壁一面に並ぶのは、吉川先生の研究室。これらの本はすべて、「ジャポニスム」の研究に関わるものです。吉川先生はジャポニスムをテーマにして、日本の様々な伝統文化を見つめ直しているといいます。「日本趣味」とも訳されるジャポニスムですが、具体的にはどのようなものなのでしょうか。吉川先生は次のように話します。「1850年代に日本が開国してから、日本とヨーロッパの文物、人の交流が急速に進みました。そんな中、欧米の一般市民の間で日本品ブームが起きたのです。うちわや扇を集めたり、インテリアとして飾ったり。日本文化にインスピレーションを受けて美術工芸品や演劇、文学、音楽などもつくられるようになりました。単なる日本かぶれのようなものから、技法や思想の影響を受けたものまで様々です。第1次世界大戦まで約半世紀続いたこの現象をジャポニスムと言います」。このジャポニスムという言葉はフランス語。フランスでまず大流行が起き、その余波がドイツ、イギリス、アメリカといった欧米諸国に広がっていったため、当時フランスの美術批評家が言い始めた「ジャポニスム」というフランス語の名称が使われています。

戦争によって衰退したジャポニスム。その研究はどのように発展してきたのでしょうか。「1960年代から本格的な研究が始まりました。浮世絵に影響を受けた印象派の絵画などが有名ですが、アメリカの建築や造園における日本の影響についても、現地の研究者は注目していました。1980年代からは研究がさらに発展。ジャポニスムに関わった様々な人・作品の研究が盛んになり、『版画に見るジャポニスム』『モードのジャポニスム』など多彩な切り口の展覧会も開かれました。また、2014年には『ボストン美術館、華麗なるジャポニスム展』が日本で開催。クロード・モネの《ラ・ジャポネーズ》という有名な絵が修復後はじめて日本にやってきて注目を集めました。この時にジャポニスムという言葉を知った人も多いと思います」。近年は研究書も増えているそうで、先生自身も『詩のジャポニスム』という本を出版しています。日本に本部があるジャポニスム学会の活動も盛んで、毎年国内外の研究者が集うシンポジウムが開かれているといいます。

形に残りにくい文化の歴史を掘り起こす

ジャポニスム研究の中で、吉川先生は特に文学に焦点を当ててきました。その理由について、先生はこう語ります。「これまでは、美術工芸の分野がよく研究されてきました。実際のものが現存する分野です。一方で、文学におけるジャポニスムは手つかずの部分がありました。ちょうど、私はフランス文学が専門で、個人的に日本の古典文学も勉強していたことから、両方を生かせる研究をしたいと考え、文学におけるジャポニスムを研究し始めました。日本の和歌がどのように翻訳されたのか、なぜ和歌とフランス詩を融合させた作品がつくられたのか、といった内容です」。そうした研究を通じて、次のようなことがわかってきました。「宣教師がやってきた頃から、日本人は詩に親しんでいる民族、何かにつけて和歌を詠む、創造力や洞察力がある民族と好意的に受け取られていました。一方、和歌の要は『自然にかこつけて自分の気持ちを詠むこと』。それが広く理解されたのは19世紀後半になってからです。これにより、和歌は日本学者の研究対象だけでなく、アーティストの着想源にもなり、和歌の翻訳と絵をミックスした本がつくられたり、歌曲の歌詞に使われたりするようになりました。ジャポニスムでは、人間と自然が同等の命を持って共存しているという日本の自然観が、産業革命に疲弊した欧米人の共感を呼んだのです」

この研究が持つ意味について、先生は次のように話します。「古い文献を読んでいると、宣教師の時代、日本とヨーロッパの交流が始まった頃から、日本文化がとてもよく観察されていると気づきます。美術工芸だけでなく、形に残りにくい文化も欧米人が体験して本に書き留めており、そうした本はわかっているだけでも千冊以上に及びます。これは現代でも同じで、茶道といった芸道、合気道といった武道は日本独自のものですが、今や海外の方のほうが熱心に実践しているとよく耳にしますね。このように海外から熱い視線を向けられているものは、日本と外国との相互理解の接点になり得ます。そうした文化が、世界でどのように解釈されてきたのかを歴史的に明らかにすることで、現代の私たちが伝統文化に新たな価値を見いだすきっかけにできればと考えています」

Fig.1――日本に関する古い本を数多く、広範に見てきた点が自身の強みと語る

218 L'ART JAPONAIS.

nement; mais l'exécution et les tons d'or, sans éclat, sont, pour les trois quarts des pièces, des plus ordinaires. Les pièces fines sont l'exception; aucune n'est de premier ordre, aucune ne tiendrait à côté des laques livrés à la circulation par la révolution de 1868 et provenant des collections japonaises, à plus forte raison, à côté de quelques-unes des splendides merveilles des xve, xvie et xviie siècles, venues en Europe pendant le cours de ces dernières années.

Parmi les amateurs plus modernes, on cite les noms de Morny et Montebello; mais leurs collections, aujourd'hui dispersées, ne peuvent se comparer avec les sept ou huit collections qui ont été formées à Paris depuis 1873, c'est-à-dire depuis le premier voyage des Sichel au Japon. Les beaux laques que ceux-ci rapportèrent

Fig.2――ルイ・ゴンス『日本美術』（1883）には、花の伝書から採った挿画も多い

Fig.3――エドモン・ヴィルタール『日本』（1879）より、雛飾りの花

先生の研究は、今なお広がりを見せています。「これまで和歌のほか、祭りや神話についても調べてきました。今はいけ花を取り上げています。いけ花ははじめ、生け方を絵を交えて説明した“花の伝書”を通して知られていきました。来日時に伝書を購入したという記録なども残っています。色の塊を重視するヨーロッパのフラワーアレンジメントからすると、日本のいけ花のラインは斬新に映りました。絵を通して知られていったため、より線が注目されたようです。装飾美術やデザインのヒントとして用いられるようにもなりました。このいけ花のように一つの日本文化でも、伝えられた経緯や時代の状況、価値観の差異によって、日本と外国では意味づけが変わってきます。そうした意味づけの違いや変遷を浮き彫りにしていくことに力を入れています」。将来は人形浄瑠璃や能といった舞台芸術も調べていきたい、と言う吉川先生。京都という地の利も存分に生かし、研究を発展させていきたいと話します。

ジャポニスムのこれから

今、日本のアニメや漫画が世界で注目され「現代のジャポニスム」などと呼ばれています。「ジャポニスムを研究すること、新たなジャポニスムを盛り上げることの本質は、自画自賛ではありません。日欧の文化交流の歴史の記憶を世界の人たちと共有し、国は違っても美意識や価値観を分かち合う、それが重要だと私は考えています」とも語ってくれた吉川先生。過去と同時に現在、未来を見据え、先生の研究は続いていきます。